

## 第4回佐賀市自治基本条例検証委員会 議事録

### 1 日時

令和7年6月4日（水） 14時00分から15時20分

### 2 会場

市民活動プラザ401・402会議室

### 3 出席委員（敬称略、五十音順） ※ ◎は委員長、○は副委員長

◎徳永 浩、○小城原 直、古賀 恵美、高原 陽子、田島 広一、福元 健志、  
松本 昌代、宮近 由紀子

### 4 事務局

岡地域振興部副部長兼協働推進課長 他

### 5 傍聴者

3名

### 6 議事要旨

#### (1) 開会

#### (2) 前回(3/24)委員会を受けての事務局の対応

##### ●事務局

- ・前回検証委員会では、事務局でまとめた大きな2つの柱「まちづくりへの参加の動機づけの強化」、「条例の周知・普及」の2つについて委員の皆さまに意見をお伺いした。その上で、前回検証委員会では委員の皆さまの意見を踏まえ、答申の方向性としては2つの大きな柱に基づいたものにする、条例の具体的な内容については今回の検証委員会では求めないことが決定された。
- ・**資料2**「佐賀市まちづくり自治基本条例に関する意見」については委員から出た意見を取りまとめたものである。「委員会として意見」の大部分は前回の委員会から変更はないが、1点前回の委員会から文言を追加している。その箇所は9ページの「Ⅱ条例の周知・普及(1)周知の仕方」の「委員会としての意見」で「条例周知の場を設け、」という文言を追記している。
- ・前回の第3回検証委員会で委員の皆さまにまとめていただいた2つの柱ごとに、委員会としての意見をまとめ、それに基づく答申素案を作成した。
- ・本日の委員会では、この答申内容について審議いただきたい。

(3) 第3期検証委員会答申書(案)について

●事務局から資料説明

《意見交換》

○委員長

- ・事務局から説明があったが、答申書としてはA4用紙1枚になる。  
各委員からの意見を集約してまとめているため、抽象性の高いものとなっているが、各委員からの具体的な意見や「委員会としての意見」は答申結果報告書として、答申とあわせて市長に届くという構成になっている。

○E委員

- ・答申(案)については、良いが、**資料3**の1ページの1の(1)の「②防災・減災」の2つ目の黒ポツの文章の「取組の推進を図るためにも」という文章がつながりとして、少し気になる。

○委員長

- ・「取組の推進を図り」としてはどうか。事務局として調整することは可能か。

●事務局

- ・**資料3**は答申書として公表されないが、答申結果報告書(案)である**資料2**の6ページにも同様の記載がある。少し事務局の方で文章を精査して、事務局の方で委員長に確認をとりながら調整するということでよろしいか。

○委員長

- ・E委員の指摘のとおり、文脈の明確化を図るように事務局と委員長の私で修正したいと思う。他に意見はないか。

○C委員

- ・**資料2**の6ページの対象は「市民等」でよろしいか。

○委員長

- ・6ページにあるこのNo.4の最後、「委員会としての意見」の「地域への愛着と防災意識につながるような取組の推進を図るためにも、地域の文化や歴史を知る取組を通じて、地域の文化や歴史について関心が高まることが望ましい。」の文章が指し示す対象ということのようであるが、これの対象は市民等、コミュニティ、双方考えられるが、事務局のほうで想定している対象というものはあるか。

●事務局

- ・もともとの意見は、「まちの名前には歴史的背景や昔の人たちからのメッセージがあるので、地域への愛着や防災意識を高めるために、分かりやすく残していくことも大切ではないか。」というものだった。  
この意見を受けて、委員会の意見としては「地域の人々がそれぞれの地域文化に関心を持ち、地域への愛着や防災意識が高まることが望ましい」とまとめている。

○C委員

- ・地域の皆さんもしっかり勉強してくださいということであると思うが、私は、ある程度そういう強制は必要だと思っている。だから、「遠慮せずに、その地域のことを学んでください」というスタンスが私は必要と考えている。そのように考えた際に、対象が誰なのか何かぼやっとしている印象があると感じた。

○委員長

- ・結果として市民やコミュニティの間で機運が醸成されることが望ましいと考えている。
- ・最近では「佐賀学」という言葉もよく聞かれ、地域の理解や誇りを深める取り組みとして、今回の議論とも非常に親和性が高いと感じている。
- ・C委員はこれまでも一貫して「もっと地域のことを知ってもらいたい」「そのためには時には強い働きかけも必要」といった意見を述べてこられた。これまで条例の周知・普及が難しかったという課題がある中で、今後はこうした積極的なアプローチも参考にしていく段階に入ってきたと感じている。

○C委員

- ・実際に、地域の歴史や地域について学びたいという人がいた場合に、誰が教えてくれるのだろうか。

○委員長

- ・市のほうで何か講師派遣リスト等はあるか。

○事務局

- ・市の文化財課や歴史・文化課などの担当部署でも、出前講座等の取組を通じて文化財の存在を啓発する活動は行っている。
- ・協働推進課として業務の関わりの中で感じるのは、地域側の取り組みの深さである。例えば、勸興校区のまちづくり協議会では、住民自身が自分たちの地域の魅力を学び、冊子にまとめるといった活動が行われている。その中には、市でも把握していないような細かな地域の情報も含まれていることがある。
- ・市として情報発信はしているが、すべてをカバーしきれない面もあり、地域住民による自主的な取り組みと補完し合う形が効果的であると考えます。

○C委員

- ・そのような具体的な例もあるというのであれば、そういう歴史や、その地域の情報を伝えるようなミッションや役割を、各地域のまちづくり協議会の中でつくっていただくことはできないだろうか。

●事務局

- ・まちづくり協議会をつくる際の約束事として、市役所の下請のようなことはしないというものがある。そのため、例えば市が、「こういう意見があったから、歴史を教えてほしい。」ということとはできない。

- ・歴史を大切にしている地域では、「歴史部会」が活動しており、南部の地区などでも、地域の歴史を題材にしたカルタを作るなどの取り組みが行われている。
- ・地域の課題を自ら見つけ出し、「これを子どもたちにどう伝えていくか」「どう引き継ぐか」といった視点で、住民自身が課題解決に取り組んでいる。  
こうした好事例を、佐賀市の全32校区のまちづくり協議会が集まり交流する地域づくり交流会等で紹介することで、他の校区への働きかけや参考事例の共有につながるのではないかと考えている。

#### ○C委員

- ・市の考え方もよく分かる。しかし、それではどうしたらいいのかということになると思う。

#### ○委員長

- ・本当は地域の団体のほうでこういう活動をしたいと、提案が上がってくるのが理想であろうと思われる。その点もあわせて、結局のところが機運醸成が必要と考えられる。

#### ○F委員

- ・この委員会の中で、防災の観点から町に関する手書きの地図や資料作成の話をした。
- ・各地域には、歴史資料や地図作り、勉強会などの取り組みがすでに存在している。
- ・今回は「防災意識を高めるために」という目的が明記されていることから、理想的には地域住民から自発的に声が上がることが望ましいが、行政側からの事例紹介も有効な選択肢である。例えば、「町名の由来」や「地域の成り立ち」を知ることが、歴史の学びにとどまらず、暮らしや防災と実は関わっているという新しい視点を提示できる。
- ・歴史を切り口にした活動を紹介・発掘し、「防災と歴史のつながり」という観点で地域活動を促すような働きかけも必要である。
- ・子どもたちと一緒にマップを作るといった具体的な活動例も考えられる。
- ・すでに実施されている活動も多いが、「そういうことなら自分たちにもできるかも」と感じられるような仕掛けや提示の工夫が求められる。

#### ○委員長

- ・確かに提案していくのはよいことである。「防災・減災」というような言葉だけでは関心を持ちにくい。「防災・減災」につながる、なぜこの地域にはこういった名前や出来事があるのかといった背景を知ること、防災への理解や関心が深まる。そういったものを、地域の人が次世代に伝えていくというような活動もあるという方法で具体的に提案しないと、なかなか参加してくれる人は少ない。そうした具体的提案を行うことが、地域の関心を引き出すための一つの有効な方法だと受け止めた。

#### ○E委員

- ・資料3の「条例の周知・普及」に関する記述に「様々な機会」という表現が繰り返されているが、具体的にどのような機会を指すのかが不明確である。

- ・「子ども」や「大人」の発言が、実際に佐賀市を変えるきっかけとなったという事例が、過去にあったのだろうか。そういった事例があれば、もっと共有されてよいのではないか。
- ・例として、赤松校区での活動に障がいのある人と一緒に新しいルールでスポーツを行い、お祭りのように地域の人と交流した取り組みがある。
- ・このように、学びや気づきをきっかけに話し合いが生まれ、地域や佐賀市の何かが実際に変わったというストーリーが重要である。
- ・「あなたの一言で佐賀市が変わった」というようなメッセージや事例が示されると、市民の声の大切さや影響力に気づいてもらえる。
- ・「様々な機会」や「様々な関係」だけでなく、「どのような場面で」「どんなことが起こったのか」といった具体例の明示が必要ではないかと感じた。
- ・もう1点、表記上のことではあるが、「大人」を「大きい人」と書くことに違和感がある。

#### ○委員長

- ・具体的な催しや活動を列挙することは制約上やむを得ないが、それぞれが実は「自治」や「まちづくり」、「協働」に繋がっているという概念が地域でまだ薄いと感じる。
- ・そのため、「これはまちづくりですよ」「協働ですよ」「自治ですよ」と教え、知らせてくれる人がいると話が進みやすくなるのではないか。
- ・それから、「大人」という表現についての意見が出たが、歯科医師会での例がある。昔、「虫歯」という漢字表記があったが、昆虫学会からのクレームでイメージが悪くなったため、現在は平仮名表記に変わっている。
- ・子ども向けの表記を平仮名にしたのに対し、大人向けは漢字表記のままで、その表記の違いに対して「大人表記も平仮名に合わせたほうが見やすいのでは」という意見もある。表記としては、今回はこのままでも構わないと感じるが、漢字のほうが見やすいという意見もあり、今後も配慮が必要と考えている。

#### ○委員長

- ・以上の意見を踏まえ、本日の審議内容をまとめた更新書の検証結果を取り入れて最終まとめを進めたいがよろしいか。

[全委員異議なし]

#### (4) 検証委員会を終えて委員から一言

##### ○A委員

- ・昨年7月に公募委員としてこの委員会に参加させていたが、当初は全く何も分からない状態だった。事前に事務局の方から丁寧なご説明をいただいていたものの、十分に理解しきれないまま、この席に着くこととなった。私自身、自治基本条例について十分な理解がないまま議論に加わってしまい、まとまりのない意見を述べてご迷

惑をおかけしたのではないかと反省している。

- ・次回には市長への答申を控えているが、これまで様々な立場の方々がこの条例について話し合い、私たち市民もその意見に耳を傾けながら少しずつ学びを深めてきた。私個人としては、この佐賀市でそのような貴重な経験をさせていただけたことに、大変感謝している。
- ・うまくまとめきれず、十分に理解できていないことも多く、いたらない点が多々あったかと思うが、この場を借りてお詫び申し上げるとともに、感謝の気持ちをもって発言を締めくくらせていただく。本当にありがとうございました。

#### ○B委員

- ・早いもので、あっという間に1年が経ったのだなと感じている。先日、栄の国まつりが2か月前倒しで開催され、少し涼しい時期に行われたことで、非常に快適に過ごすことができた。開催時期を早めるという大きな判断を、市が様々な調整をして実現してくださったことに、本当に感謝している。やはりお祭りというのは、準備から片づけまで地域住民が関わる機会が非常に多く、地域のつながりを感じられる貴重なイベントである。そうしたことを佐賀市が一生懸命支えてくださっているのは、非常にありがたいことだと改めて実感した。
- ・ここで1点、提案というよりも意見を述べさせていただきたいのだが、私の地区のまちづくり協議会でも話題になったことがある。公民館や体育館は、災害時の避難場所として使われる施設なので、普段から「人が泊まれる場所」としての準備や利用の体験ができるとよいのでは、という意見が出た。例えば、子どもたち向けに「お泊り会」のような形で一度泊まってみることで、防災の訓練にもつながるし、万が一のときに利用への心理的ハードルが下がるのではないかと考えている。もちろん、飲酒は禁止、夜9時以降は静かに過ごすなどのルールを設けることが前提になる、そういった形での体験的な取り組みができると良いのではないか。
- ・実は、私の近所の施設で不審者による殺人事件が発生し、大変ショックを受けた。その施設には10年ほどボランティアで関わってきたが、事件後、そこを出た若者たちが「もしかしたら自分の親が来るかもしれない」と不安で自宅で寝られなくなり、「どこか地域で泊まれる場所があったら」といった声も上がっている。また、DVの被害者や「この日だけは家にいたくない」というような事情を抱える方々の一時的な避難場所としてのニーズもあると感じている。さらに、まちづくり協議会としては高齢者のひとり暮らしの情報を把握したいところだが、一方で「闇バイト」などの影響でひとり暮らしであることを知られたくないというご家族からの要望もある。
- ・事件などが起きた際には、「今日は1人で過ごせない」という高齢者が複数出てくることもある。そういったときに、地域で一時的にでも宿泊できる場所があると安心ですし、防災訓練としての意味もあるのではないかと考えている。そのため、より柔軟に利用できる仕組みや体験的な機会があると、地域にとって非常に心強いものにな

ると思っている。

- ・最後にこのような意見を述べさせていただいた。ありがとうございました。

#### ○C委員

- ・今回の検証委員会には、第2期に引き続き参加させていただいている。今回の第3期は、第2期と比べると、おそらく回数的には半分ほどだったのではないかという印象を持っている。第2期の際には、逐条解説なども行ったため、かなり多くの回数が必要だった。それに比べ、今回は4回程度とコンパクトに進行していただいたことで、非常にありがたく感じている。一方で、私たちは自由に意見を述べさせていただいたが、それを取りまとめる事務局の皆さまは、大変なご苦勞をされたことと思う。そのご尽力に、深く感謝申し上げます。本当にお疲れさまでした。
- ・冒頭でも委員長からお話があったが、やはり今後はまちづくりに参画する人をもっと増やしていきたいと強く思っている。特に「事業者」の参画を、もっと積極的に進めていくべきではないかと考えている。
- ・たとえば、赤松校区では、公民館の運用方法を見直す取り組みが進められている。その中で、まちづくり協議会なのか自治会なのかはっきりしない部分もあるが、「公民館をぜひ活用してください」とのお声をいただいたと会社でも報告も受けた。こうした地元からの呼びかけは、非常にありがたいものである。そして、まだ声がかかっていない企業の中にも、「何か地域のために役に立ちたい」と考えているところはたくさんあると思う。だからこそ、自治会やまちづくり協議会の皆さんには、もっと積極的に事業者に声をかけていただきたい。黙っていて事業者が自然に関わってくることは、ほとんどないと思う。そのため、「ぜひ一緒にやりませんか」と声をかけていただくことで、「それならば」と動き出す企業は、きっと多いはずである。そうした積極的な関わりの呼びかけを、ぜひお願いしたい。
- ・答申(案)を読ませていただいたが、その中に「情報発信体制の充実が求められる」といった記述がある。これは、私たちが佐賀市に対して求めていることだと思う。佐賀市は、これまでもかなり頑張って情報発信を行っている。ただ、それがうまく受け取られていない、つまり、受け手側の問題が大きいのではないかと感じている。だからこそ、「受け手」を育てていくことが、今後ますます重要になる。自治会やまちづくり協議会が、地域住民や事業者にどんどん声をかけ、関わりに引き込んでいく。そうしたプロセスの中で、人々がまちづくりや自治の仕組みに触れ、関心を持ってもらう。そのような「教育的な関わり」が求められていると感じている。情報をただ発信するだけではなく、それを受け止めてくれる人を増やしていく取り組みを今後のまちづくりの中で大切にしていってほしいと、改めて強く思った。

#### ○F委員

- ・今回、私は初めてこの検証委員会に参加させていただいた。拙い言葉ではあったが、自分の思ったことを率直にお伝えし、それを皆さんで審議していただけたことを大

変ありがたく思っている。

- ・今回のテーマは、これまで皆さんで作りに上げてこられた条例を、いかに広く普及させていくかという点にあったと思う。そのプロセスは非常に大変だったのではないかと感じている。
- ・私は防災の分野に関わっているが、C委員のお話にもあったように、地域の高齢化が進む中で、祭りを含め地域行事の担い手が減ってきている現状がある。また、「自治」とは本来、自らが関わることを意味するが、今は「行政が何をしてくれるか」という受け身の意識が強くなっているようにも感じる。
- ・特に若い世代にとっては、「大変そうだ」「関わると負担になる」といったマイナスのイメージが先行してしまっており、担い手の裾野を広げるうえでの大きな障壁になっている。そうした印象を払拭し、「大変だけれども、やりがいがある」「地域で活動することで、自分がそのまちの一員であることを実感できる」といったポジティブなメッセージを、しっかりと伝えていく必要があると感じている。そのためにも、「今、地域でこうした人たちが活躍している」という具体的な紹介や事例を積極的に発信していくことが大切だと思う。
- ・また、企業の皆さんの力も、今後のまちづくりや防災において非常に重要である。企業側も「地域のために何かしたい」「こんな技術や資源があります」といった思いを持っているところは多く、実際に動き出している企業もある。ただ、その思いが地域とつながるには、間をつなぐコーディネーター的な存在が必要で、今後、そうした橋渡し役がますます重要になってくると感じている。
- ・具体的な事例として、7月5日に富士公民館で「防災フェスタ」が開催される。このイベントは、子どもたちのために防災を学べる機会をつくりたいという一般社団法人の人たちの思いから始まった。今回は、あえて「有料イベント」として実施される予定で、公民館を活用して行う“実証実験”でもある。富士町では実際に災害を経験したこともあり、まちづくり協議会や地域のお母さん方、私たちも含め、広報や情報共有の重要性を改めて認識し、それぞれが協力して取り組んでいる。
- ・そうした中で、最近は大企業からも「私たちはこういうことができます」「一緒にやりたい」といった申し出をいただくようになってきた。だからこそ、遠慮せず「企業募集」などの形で明確に呼びかけを行い、つながりをつくっていくことが大切だと感じている。企業との協働が実現すれば、地域にとっても非常に大きな力になるはずで、今後は、そうしたコーディネート機能をしっかり育て、広げていくことが必要だと思う。

#### ○E委員

- ・皆さんとお会いし、意見交換を重ねる中で、改めて「地域のつながりの大切さ」を実感した。市民として地域に関わること、また人と人とのつながりを意識することが、今の時代だからこそ重要だと強く感じている。

- ・私は高齢者のサポーターとして活動しているが、高齢の方々はその時々体調により様子が異なるものの、「誰かと会って話すのが楽しい」とおっしゃってくださる。ひとり暮らしの方も多く、地域によっては孤立しがちな現状もある中で、人はやはりどこかで誰かと関わっていたいという思いを持っているのではないかと。無理に関わりを持たせる必要はないが、知っていることを少しでも周りに伝えたり、そっと寄り添ったりすることが、地域に暮らす一人として大切なことではないかと改めて感じている。

#### ○D委員

- ・今回、私は検証という観点から参加させていただいたが、文言自体について大きく修正が必要と感じた箇所はあまりなく、むしろ「どう発信し、市民の意識をどう変えていくか」に議論の焦点が集中したように思う。委員長からもご指摘があったように、抽象的な表現が一見分かりにくく感じられる面もあるが、逆に抽象的な表現にとどめておくことが必要な場面もあると感じており、そうしたバランスは今後も工夫が求められるところだと思う。
- ・まちづくりに人を巻き込むためには、仕掛けづくりや意識変革が重要である。例えば、大学では若い世代に向けた意識づけや参加の促進に取り組んでおり、「佐賀学」などの枠組みで佐賀大学をはじめとした教育機関がボランティア活動やまちづくり事業に関与する仕掛けが進んできている。
- ・今後もそうした事例を増やし、活動内容や情報発信を充実させることが必要だと感じている。その一方で、「実は佐賀がどれだけ頑張っているか」「どれだけ魅力的な地域であるか」といった点が市民自身に十分伝わっていない側面もあると思う。たとえば、佐賀が「住みやすい都市ランキング」に入っているといった客観的データや、移住者や外国人からの「東京より住みやすい」「母国より快適」といった声をもっと積極的に伝えていくことは、まちづくりに対する意識の変革につながる可能性があると感じている。

#### ○副委員長

- ・今回の委員会、振り返ってみると、第1期の検証委員会では、「文言がこれでいいのかどうか」という話を中心だったが、第2期、第3期あたりからは実際に活動されている現場の話や、それに対する意見が多く出て、とてもいい場になったと思っている。やっぱり「広報でどう伝えるか」というのは本当に難しいと改めて感じた。まちづくり協議会や自治会でも、リーダーがしっかりしているところはやっぱりうまくいっている。でも、「誰かがやってくれるだろう」というところは、なんとなくそのまま過ごしてしまっているように思う。
- ・「やりたい気持ちはあるけど、どう動いていいかわからない」という声もよく聞く。最近では、河川清掃などでも市や企業が一緒になって参加してくれるようになってきていて、そうやって1人でも2人でもいいからまず参加してみると、「ああ、こう

やって地域と関わっていけばいい」と分かってくる。やっぱり誰かが声をかけて、顔を合わせて話すことで「ちょっと参加してみようかな」って気持ちになる。参加してくれるだけでもありがたいが、やっぱり継続してもらうには、表彰制度みたいなものが効果あると思う。10年続けないと表彰されないというのではなくて、5年頑張ったらもう表彰してもいいのではないかと、というようにすることで、多様な人たちがもっと協力してくれるようになると思う。たとえば、佐賀東高校の生徒会が河川清掃に参加してくれたとき、自治会長が「表彰してあげてください」と推薦してくれたが、一度は見送られてしまった。それではいけないということで、もう一度見直して、最終的には表彰された。そうやって「頑張っている人」をきちんと見て評価するってことは大事だと思う。

- ・ 少子高齢化や 8050 問題（80 代の親が 50 代の子どもを養っている）など、地域ならではの課題がある。空き家問題にしてもそうだが、やっぱり地域のことは地域でしか分からないし、「地域で解決していかないといけない」ということは強く思う。だから、防災とか、何かひとつテーマを決めて「まずここから取り組みましょう」という風にやっていかないと、いろんな課題を一気に出されても、結局中途半端になってしまう。例えば、自治会の総会では「この 6 つの中から、まず 1 つやってみてください」という風に伝えるようにしている。
- ・ 最後に、やっぱり後継者を育てていくのも時間がかかる。「この人は向いているな」と思ったら、その人にしっかり関わって、丁寧に巻き込んでいくことが大事である。今回の委員会は、そういった現場のリアルな声が出て、本当に良い意見交換ができたと思う。

#### ○委員長

- ・ 先ほども委員の中から「佐賀には何もない」って話が出たが、実はそのことは、佐賀だけではないようである。新聞社の局長の方と話をしていたら、「うちの地元には何もない」というのは、いわば自虐ネタみたいなもので、全国どこでも言われているらしい。その言葉の発端は何だろうかと話をしていたら、ある方から、昭和 40～50 年代に静岡新聞が「静岡には何もない」という記事を面白おかしく書いたのが最初だったらしいと聞いた。それが面白くて、他の地域でも「うちもやろう」と広まって、結局何もないという言葉だけが全国に広がって残っている、そういう流行だったのではないかとことだった。だから実際に「何もない」わけではない。むしろ佐賀は、全国的に見てもコミュニティがしっかり残っているほうだと思う。
- ・ 私自身、佐賀と京都と東京を行ったり来たりする生活をしているが、東京でも京都でも、佐賀でも、肌感覚として感じるのは、「お祭りが残っている地域は、住民同士のつながりが濃い」ということである。逆に、お祭りがもともとない、あるいはもう途絶えてしまった地域では、人と人のつながりが薄くなっている印象で、共同作業の場がなくなって、情報交換する機会が減ったことが原因だろうが、やっぱり「お祭り

の力」って大きいと、最近強く感じている。

- この1年間、みなさんと一緒に議論を重ねる中で、当初は「自分に務まるかな」と正直ちょっと不安もあったが、副委員長がどっしり横にいてくださって、私は大船に乗せてもらったような感覚で、安心して参加することができた。また、皆さんがそれぞれの専門や立場から多様な意見を出してくださって、本当に学びの多い時間であった。こういう風にいるんな視点からの話を聞ける会議に、1年間参加できたことは、私にとってとても貴重で幸せな経験であった。最後に、これをうまくまとめてくださった事務局の皆さんにも、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。
- それでは、進行は事務局の方へお返ししたいと思う。

#### (5) 事務局連絡

- 次の日程を候補日として調整している。ただし、市長の予定が確定でないので、日程の都合がつかない場合には再度、各委員に日程調整への協力を依頼する。

#### 【答申（候補日）】

7月28日（月） 14:00～14:30

8月 5日（火） 16:45～17:15

#### (6) 閉会